

葬送
儀礼

の現状を考える ②

直葬の現状報告

浄土真宗本願寺派 総合研究所
葬儀研究プロジェクト

今回は、首都圏など都市部の葬祭業者を対象とした聞き取り調査をもとに、直葬の現状について報告致します。

近年、葬儀関連の報道を目にすることが増えてきたように思います。その内容も、葬儀にかかる経費の問題、直葬、グリーンケア、永代供養、エンバーミング、手元供養、散骨、樹木葬など、さまざまです。こうした影響もあってか、葬儀の形式は多様化しています。特に家族葬などのような従来の形を簡素化したもの、また直葬やお別れ会など宗教者が関

わることの少ない形式が増加傾向にあります。その中でも直葬は、宗教者が介在しない、宗教儀礼を行わない形式が多く、宗教者にとつてその内実を把握しづらいのが現状です。しかも首都圏では、このような形式の葬儀が全体の二割も実施されていると言われています。そこで、当研究所では、「直葬」の現状をさぐるべく、首都圏など都市部の葬祭業者を対象とした聞き取り調査を実施しました。

■直葬の定義

直葬という言葉は広く周知されてきましたが、その意味するところにはばらつきがあるようです。実際、現場に携わる業者からは、以下のような回答を得ました。

- ・ 宗教者が介在することはない。花だけを荘厳し、火葬のみを行う。
- ・ 祭壇のないものを直葬と呼ぶ。
- ・ 直葬はそもそも祭式ではないので、葬儀ではない。
- ・ 枕飾り、焼香があり、簡単な儀式を行う。

このように直葬は、「遺体をそのまま火葬場に移送し茶毘に付す」と一応の共通認識があるものの、業者によつて理解や扱い方が異なることがわかります。宗教者が関わるものもあれば関わらないものもあります。また、「そもそも葬儀ではない」と判断する業者もあれば、焼香など簡略化した儀式を執行することで

「直葬」を葬儀として取り扱う業者もありません。つまり、「直葬」と言っても、業者それぞれの規定によって実施されているのが現状であり、その定義には大きな幅があることがわかりました。

■直葬を扱う 葬祭業者の実態

今回の調査から、業者によって直葬の比率に大きな差があることもわかりました。比率の高い業者であれば五〇%程度、比率の低い業者では一〇%未満、もしくはほとんどないという結果でした。店舗型の葬祭業者を対象に聞き取り調査を実施していましたが、調査を進めていく内に、店舗型だけでは直葬の実態は把握できないということに気付きました。直葬を依頼する方はインターネット型葬祭業者を通じて選択している実態が明らかとなったからです。店舗経営とインターネットでの受付を併用しているA社では、店舗での直葬依頼は減少傾向なのに対

し、インターネットでの受付の全てが直葬の依頼となっています。さらに、B社は、「直葬専門のインターネット型葬祭業者の存在が直葬の実態把握をより複雑にしている」と述べられました。このように、受付方法の違いによって直葬の割合が異なってくるということがわかったのです。

同業者である葬祭業者でさえ、直葬専門のインターネット型葬祭業者の実態は把握しづらなのが現状です。しかし、直葬の問題をより明確に捉えるためには、これらの業者の実態把握は欠かせない重要な点ともいえるでしょう。

■直葬を選択する理由

直葬を実施した人たちはどのような理由で選択したのでしょうか。その理由についても、お聞きしました。主な理由は以下のとおりです。

- ・ 経済的理由。(全ての業者)
- ・ 親類を始め、他の方に迷惑をかけた

ない。(全ての業者)

- ・ 親族の付き合いが煩い。
- ・ 少子高齢化が進む中、故人を弔う遺族がいない。

「費用をかけたくない」という理由が多かったことは、各種メディアでも多く報道され、有識者も指摘するところであり、予想通りの結果といえます。一方で、「迷惑をかけたくない」との理由が非常に多いことには驚かされました。C社では、「直葬を選択する人の決まり文句だ」と指摘されるほど、「迷惑をかけたくない」ことを理由にしている人が多いようです。

「迷惑をかけたくない」ことには、現代人が抱える人間関係のあり方が強く反映されているように思います。「あの親戚とはあまり会ったことがないので気を使う」「知らない人と接するのは嫌だ」など、故人を取り巻く人間関係を引き継ぐことに抵抗を示す喪主や遺族が少なくないでしょう。こうした現象は、人間関係の希薄化による影響が理由の一つと

して考えられるのではないのでしょうか。

また、少子高齢化が進行することで、「故人を弔う遺族が存在しなくなる」という新たな社会状況も、直葬が増加する一因となっているようです。今後、この社会状況が如何なる問題を引き起こしていくのか、注視していかなければなりません。

■「直葬」の言葉が

一人歩き

いくつかの業者から、「直葬」という言葉が一人歩きしている現実を危惧する声が聞かれました。最近では、依頼の際に遺族から「直葬でお願いしたいのですが」と求められることが増えてきているようです。中には、「マスコミで報道されているから今はこれが主流なのでしょう」と言われる方もいたそうです。しかし、直葬について具体的に説明すると、直葬を希望した方の多くが、最終的に従来の形式を選択するそうです。つまり、こう

した直葬希望者の多くは具体的な内容を理解しておらず、業者の説明を受ければ従来の形式を選択することがほとんどであるという現状を確認することができました。

一方で、インターネット型葬祭業者では、すでに直葬による収益モデルが確立されており、事前に直葬の説明をすることはないようです。

直葬には経済的負担が少なく、親類などに迷惑をかけなくてすむ、というイメージがあるように感じます。そうしたイメージが先行し、直葬の内容を把握しなまま希望される方が多く存在するという新たな問題も見えてきました。

■僧侶の言葉の重み

今回、聞き取りした葬祭業者の多くは、直葬の現状を否定的に捉えています。そこで、直葬の増加を止めるにはどうしたら良いかお聞きしたところ、「僧侶の発言の重み」を指摘する回答が多くありま

した。葬祭業者が遺族に説明をしても聞き入れられないことが、僧侶の一言ですんなりと受け入れてもらえる場合が多いのだそうです。一方、憂慮すべき現状として、寺院に所属する門徒であっても、直葬を希望する方が散見できるとも述べられました。

こうした現状を受けて、僧侶から、葬儀を勤める必要性や意義を丁寧に伝えていくことで、直葬を希望する人が別の選択肢を考えることにつながっていくのではないかとのご指摘をいただきました。

一方で、素行の悪い僧侶の振る舞いや言動を問題視する声も少なからずありました。直葬が選択される背景には、僧侶の葬儀に対する姿勢も影響を与えているようです。

■小 結

人口が流動的で定住率の低い都市部において、葬儀はサービス業として定着しています。また、「海洋散骨」「樹木葬」

「手元供養」などのように、従来の納骨とは違う形態も次々と出てきています。サービス業として葬儀を捉えた場合、競争原理に基づき営利を追求していく中で、「直葬」「家族葬」などさまざまな形が提唱されているのでしよう。

直葬の現象は、「僧侶が関わることはないので関係がない」などの理由で無視することも可能です。しかし、「宗教儀礼のない・宗教者が介在しない」という現象の増加は、一般の方々にとって、仏法と接する場の減少を意味すると考えることもできます。「僧侶の発言が重要だ」と指摘くださったように、今こそ私たち僧侶が、さまざまな場面で葬儀について語ることが求められているのではないのでしょうか。

直葬の選択理由に経済的負担を挙げましたが、負担と感じている内容もさまざまです。生活が困窮してはお金をかけられない場合もあれば、単に葬儀にお金をかけたくないという人もおられます。特に、宗教儀礼をしたくてもできない人

たちに、お寺、僧侶はどのような関わりができるのでしょうか。ここで一つ、お寺で葬儀をする「寺葬」を提案します。お寺には宗教儀礼としての葬儀を執行できる条件が揃っています。葬儀会館に比べると経費もあまりかかりません。阿弥陀さまを前にした厳かな儀式が展開され、参列した方々に温かみのある印象を与えることができるのではないのでしょうか。この印象が直葬の増加を止めることにつながるのではないかと考えます。

また同じく直葬の選択理由の一つとして、「迷惑をかけたくない」との声がありました。この声は、人間関係の希薄化と深い関係があるものと考えます。人間関係の希薄化は、人々の孤立を招く大きな要因であり、支え合う人間関係が減少する、不安の多いあり方といえるでしょう。そうした希薄化が進む中で、私たち僧侶にできることは何でしょうか。例えば、普段お付き合ひのあるご門徒はもちろんです、そのご門徒の喪主となる人、遺族となる人、郷里を離れたご門徒など

に対し、日常から積極的にコミュニケーションを持つことが考えられます。現在、地域社会のネットワークやつながりに関する提言は、さまざまな分野で模索されています。お寺も同様に、さまざまなつながりの中で護持運営がなされています。そのつながりを普段の寺院活動から見つめ直し、地道な歩みを続けていくことが、直葬という現象の流れを止めるきっかけになるのではないかと考えます。

(網代豊和 那須公昭)